

## 少年犯罪問題へのナラティヴ・アプローチの試み：

「神戸の少年事件」を事例として

瀬戸 知也

A Narrative Approach to Juvenile Crime Problems:  
in case of "Juvenile Incident at Kobe" in Japan

Tomoya SETO

本稿は、「ナラティヴ・アプローチ」という研究スタイルをとって、「神戸の少年事件」<sup>(1)</sup>を読もうとする試みである。より具体的には、「現象としてのナラティヴ」及び「方法としてのナラティヴ」という二つの観点<sup>(2)</sup>から、「神戸の少年事件」にたいして、ナラティヴな探究をおこなうことを目的とする。

議論は、以下の三つの段階を踏んで展開される。

[第一の段階]：前提的議論として、「ナラティヴ narrative」という概念（装置）を導入するにあたっての留意点を確認する。ナラティヴ概念使用の前提、文脈、研究スタイルについて略述する。[第二の段階]：「神戸の少年事件」をめぐるさまざまな語られてきた「ナラティヴ」（「現象としてのナラティヴ」）を検討する。特にマスメディアとの関係に留意しつつ、この「事件」の「語られ方」の諸相を明らかにする。[第三の段階]：「方法としてのナラティヴ」という問題関心を根底におきつつ、ナラティヴにかかわる行為者としての、書き手／語り手／作中人物／聴き手／読み手などのポジションから成る「ナラティヴ・コミュニケーション」の問題として、この「事件」を読む（読みなおす）。

### 1. 問題を語る方法への問い：なぜ、ナラティヴか？

#### 1-1. 前提

ここで「ナラティヴ」という概念（装置）を使用する前提は、以下のとおりである。

- (1) ナラティヴは、人間の行為を組織し、維持する原理である (Sarbin, T.R.)。ナラティヴが、リアリティを構成する。リアリティは、ナラティヴによって、レトリカルに達成される。
- (2) ナラティヴは、人間が自分の生活を理解する方法であるが故に、他者の経験を理解するための有効な方法となる (Richardson, L.)。
- (3) ナラティヴは、「メタ・コード」である (ホワイ特, H.)。「メタ・パラダイム」としての

「ナラティヴ・パラダイム」(Fisher, W.)。

- (4) 人間の思考のモードには、「論理・科学的モード」以外に、「ナラティヴ・モード」と呼ばれるモードがある(ブルーナー, J.)。合理性にしても、「伝統的合理性」以外に、「ナラティヴ的合理性」がある(Fisher, W.)。
- (5) 人間は、「物語る動物」である(「ストーリー・テリング・アニマル」(マッキンタイア), 「ホモ・ナランス」(Fisher, W.))。

## 1-2. 文脈

また、「ナラティヴ」という概念(装置)の有効性については、次に示すような人間・社会諸科学における議論の文脈を参照している。

- (1) 象徴的相互作用論や社会構築主義(構成主義)等の理論展開において「ナラティヴ」が重要概念であるように(Richardson, L. et al.), 人間・社会諸科学における「ナラティヴ・ターン」がひろく認識され、いわゆる「物語論」の研究に限定されない、幅広い議論の文脈がつくられてきた(Kreiswirth, M., et al.)。
- (2) 社会調査研究方法論の領域における量的方法論に対比される質的方法論の模索の一つの結果として「ナラティヴ」に関心が向けられ、その結果、各種の「ナラティヴ・アナリシス」(Labov, W. & Waletzky, J., Riessman, C. K., Cortazzi, M., et al.) や「ライフ・ヒストリー(ストーリー)」研究(Hatch, J. A. & Wisniewski, R., Liebes, T., et al.) の文脈が形成されてきている。
- (3) 各種の臨床領域における実践的概念として「ナラティヴ」が注目されている。たとえば心理療法としての「ナラティヴ・モデル」(ホワイ特&エプストン)や「ナラティヴ・セラピー」(マクナミー&ガーゲン, Freedman, J. & Combs, G., et al.), 「ナラティヴとしてのAC」(野口裕二)等々、臨床実践を支える鍵概念となっている<sup>(3)</sup>。

## 1-3. 研究スタイル

また、これまでの「ナラティヴ」に関わる研究スタイルは、以下の三種の研究群に整理されるのではなかろうか。

- (1) ナラトロジー(narratology): ナラティヴそれ自体の成り立ち、その固有のロジック・意味を探究する立場。特に、ナラティヴの種類や形態(形式構造)、機能に注目する。ナラティヴそれ自体を研究対象とする立場である。主に「構造主義」の理論枠組みに依拠する。
- (2) ナラティヴ研究(narrative study/research/inquiry): ある研究対象の認識のための説明のツールとしてナラティヴの概念を採用し運用する立場。ナラティヴそれ自体のロジックだけでなく、ナラティヴの内容の分析にも中心がおかれる。
- (3) ナラティヴ・アプローチ(narrative approach): ナラトロジーとナラティヴ研究を総称する立場。と同時に、「アプローチ」として方向づけることで、研究の視角としての「ナラティヴ」の概念の特徴を明確にする立場の表明でもある(cf. 瀬戸知也(97))。

ここでは、(3)の立場の具体的展開を試みたい。

## 2. 「酒鬼薔薇聖斗」ナラティブの語られ方：現象としてのナラティブ

ここであらためて確認しておきたいことは、今回の「事件」を論じるにあたって、「事件」そのものの意味を（その実体性を前提にして）問題にする仕方と、「事件」を語るナラティブを（その実体性を前提にしないで）問題にする仕方という、二つの異なった論じ方があるということである。ここでは、後者の立場をとる。

では、この「事件」は、どのように語られてきたか。

先ず、「語られ方」の種類を見渡してみたときに、次の三つの語りのスタンスをみることができるように思う。(1)「事件」にかかわった少年の特異性・病理性を主張するスタンス、(2)現代の子ども問題として共通する問題状況を語ろうとするスタンス、そして、(3)少年の残した各種の文書の意味をより深いレベルにおいて探ろう（読もう）とするスタンスという、三つのスタンスである。

(1) 「事件」の特異性を強調する語りは、残忍な方法で殺害されたのが小学生であった上に、その加害者が、当時14歳の中学生であったという事実や、遺体の一部とともに残されていた「紙片」及びその後地元新聞社宛に投函された「手紙」の内容、あるいは加害者の「日記」や「作文」の内容が、マスメディアを通じて公開されるなかで、この「事件」を語るナラティブの特徴のひとつを形成していった。その過程には、マスメディアに登場した専門家（主に犯罪心理学や精神医学等の）による名付け、すなわち「反社会性人格障害」や「行為障害」、「性的サディズム」などの用語による、この「事件」の特定の学術的説明による色付け（それに伴う方向付け）の様態をみることができる（小田晋(97)、他）。

(2) 一方で、この「事件」の、現代の子どもがおかれた問題状況としての共通性を指摘する語りも、様々なレベルにおいてみられた。その際に主な根拠とされたのは、加害者の少年がおかれた境遇・環境（家庭・学校・地域・メディア）の問題であり、現代日本の社会構造の中で、この「犯行」がうみだされるにいたるメカニズムの解明の試みが様々な語られた。たとえば、マスメディアによって「犯行声明文」と名付けられた「手紙」の中に登場する「透明な存在」という用語は、学識経験者によって、この加害者の少年に限らない現代の子どもの状況全般を象徴する用語であるとの解釈が示され、（マスメディアによって）その論点が焦点化されたりもした（宮台真司(97)、他）。

(3) 今回の「事件」においては、加害者の少年が、語った／書き記した（とされる）いくつかの文書が、マスメディアを通じて、マスメディアの「受け手」であるわたしたちの前に提示されてきた。この点は他の少年事件と比べたときの今回の「事件」の特徴でもある。しかも、それらの文書は、少年の犯行の事実を検証するためのデータとしてだけでなく、複数の解釈に向けてひらかれた「テキスト」として読もうとする語りを現象させたということが、今回の「事件」に関するナラティブの、三つめの特徴である。たとえば、自らを「酒鬼薔薇聖斗」と名のる人物が登場する自伝的フィクション化の試み（桜井亜美(97)）などには、加害少年の特異性や社会環境の問題へと今回の「事件」を帰属／還元するので

はなく、むしろ、「ナラティヴ」の問題として、この「事件」の、より深い層における意味を探究しようとするスタンスのあらわれ（あるいはその萌芽）を、見て取れるように思われる<sup>(4)</sup>。

### 3. ナラティヴ・コミュニケーションの問題として読む：方法としてのナラティヴ

本稿は、この「事件」を「ナラティヴ」の問題としてとらえるというスタンスに属する試みのひとつである。さらにここでは、ナラティヴにかかわる行為者のあり方を問うために、「ナラティヴ・コミュニケーション」という概念（装置）を導入したい。

この概念（装置）導入の第一のメリットは、一般的なコミュニケーションにおける「送り手－受け手」関係を、ナラティヴであるがゆえに、より多層的な担い手の関係として、つまり、書き手／語り手／作中人物／聴き手／読み手といった多層的な担い手のポジションの複合としてとらえることができるところにある。したがって、自己／他者の「ポジショニング」や「多元性」の問題などもより見えやすくなるというメリットがうまれる（cf. Czarniawska(98)は、フィールド調査における調査者の「自己」の揺らぎを問題にする中で、「ポジショニング」という概念の有効性を指摘している（Czarniawska(98),p.41.）。つまり、たとえば「読み手としての他者のポジショニング」や「書き手としての自己のポジショニング」などによって人間のコミュニケーションが調整されると考えるのが、ナラティヴ・コミュニケーションの発想である。

また、第二のメリットは、ナラティヴ・コミュニケーションとしてとらえることによって、ナラティヴの複数性（常に「オルタナティヴ（もうひとつ別の）」ナラティヴの可能性をもつということ）をより明確に示しうることである。というのは、コミュニケーションに「一回性」という特徴がみられるように、語られ／聴かれ、書かれ／読まれるナラティヴもまた、「一回性」をもち、「オルタナティヴ」の可能性を常に潜在させているからである。したがって、ナラティヴの問題を、「オルタナティヴ」の可能性という観点からみる上でも、有効な概念（装置）としてあるといえる。

このようにして方法的に自覚化されたナラティヴ・コミュニケーションの問題としてみたとき、「酒鬼薔薇聖斗」（の／をめぐる）ナラティヴは、どのように読む（読み直す）ことができるのだろうか。

たとえば、ナラティヴ・コミュニケーションの担い手という観点からみると、「酒鬼薔薇聖斗」（の）ナラティヴは、たとえば、あの「犯行声明文」を例にとると、「手紙」という形式が指し示すとおり、特定の「内包された読者」（W.イーター）が想定されている。それは、マスメディア宛に書かれたナラティヴであり、その「返事」は、以降のマスメディアにおける「酒鬼薔薇」関連の報道ということになろうか。かくして、マスメディアというナラティヴの中の作中人物としての「酒鬼薔薇聖斗」が誕生し、生き始めたのである。

しかし、一方で、彼のナラティヴは、書き手のポジションが、ある特定のプロット上の作中人物としてのポジションとして固定化されてしまっており、そこには、「ポジショニング」という「距離化」の認識が欠けているため、「オルタナティヴ」なナラティヴの可能性に向けて

ひらかれていないという特徴もまた、指摘できよう。

その一方で、「酒鬼薔薇聖斗」(をめぐる)ナラティブについていえば、「酒鬼薔薇聖斗」(の)ナラティブを媒介として、ナラティブをめぐるナラティブ(パラ・ナラティブ)としての特徴をもつと同時に、そこには、加害者の少年の特異性や社会環境の問題性を、この「事件」を素材にして、雄弁に語り／聴く「解釈共同体」(S.フィッシュ)の実践の様態をみることができる。そこでは、固定化された「語り手」／「聴き手」としてのポジションが自明視され、定型化されたナラティブにおいて「酒鬼薔薇聖斗」を「作中人物」化するというプロット化が自明な手続きとされている。(ただし、前述のとおり「オルタナティブ」なナラティブがみられないというわけではない。)

これらの特徴に示されているように、ナラティブ・コミュニケーションとしてみたときに、「酒鬼薔薇聖斗」ナラティブには、ひとつの欠如ないしは不足があるということがわかる。

つまり、ナラティブという方法のメリットが、別の視点からものごとを構成しなおす手段としてナラティブを用いることで、特定のナラティブにとらわれなくなるところ(自明視されたリアリティをかたちづくるナラティブの相対化による、「オルタナティブ」なナラティブの可能性への気づき)にあるとしたとき、「酒鬼薔薇聖斗」ナラティブには、自らのつくり出したナラティブの「オルタナティブ」化という点で、ひとつの問題性がみられる、ということができるだろう。

#### 4. 「神戸の少年事件」というナラティブ：＜もうひとつ別の＞ナラティブを読む

ここでもう一度、「神戸の少年事件」の問題をナラティブの相において探究するという本稿の基本方針に戻って、ここまでの議論を振り返ってみたとき、ここまでの議論のもつ限定性、ある一面的な議論にとどまるものであったということに気づかされる。つまり、加害少年が造形した「作中人物(キャラクター)」である「酒鬼薔薇聖斗」(の／をめぐる)ナラティブにだけ目を奪われ、「神戸の少年事件」を語ろうとするという一面性にとらわれすぎてしまっていたのではないか。

そこで、ここでは、この事件のもう一方の当事者＝被害少年・少女の親たちが語るナラティブに注目し、問題をより多面的にとらえる試みに着手してみようと思う。

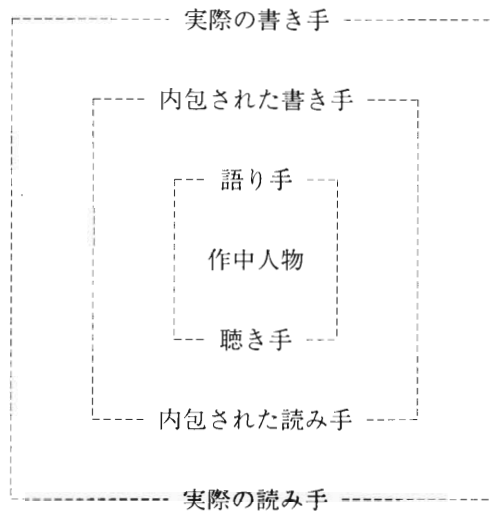
この試みは、この事件のナラティブにおける、オルタナティブの問題を探究する試みである。

さいわい現時点において(1998年10月)、書物という形で公開されているものが、2冊ある。1冊は、1998年1月刊行の『彩花へー「生きる力」をありがとう』(以下、『彩花へ』)であり、もう1冊は、1998年9月刊行の『淳』である。前者は、3月の事件で被害にあった子どもの母親による手記。後者は、5月の事件で被害にあった子どもの父親による手記である。

この2つの手記を、ナラティブの問題に注目しつつ読みなおしてみると、**「神戸の少年事件」というナラティブの、＜もうひとつ別の＞、より深い層における意味の探究へとさらに議論を展開していくことができるのではなかろうか。**

議論に入る前に、ナラティブ・コミュニケーションのモデルを確認しておこう。

(Onega,S.et.al.(96), p.11. 等参照のうえ作成)



#### 4-1. 手記という方法

ここで取り上げた二つの手記には、子どもを失った親の悲しみや加害者への怒りの感情が、その根底に流れていることは、一読することで、明らかである。

ここでは、ナラティブへの関心にもとづき、先ず、二人の書き手がいかなる読み手を想定しているか、についてみていくことから始めよう。

山下京子氏による手記『彩花へ』は、著者によって「『被害者の告発』という次元のものにしたいくはないのです」(『彩花へ』3頁)「私と娘の個人的なストーリーにすぎません」(『彩花へ』5頁)と本書の性格付けをすると同時に、「同じように苦しんできた人たち、いえ、すべての人々につたない言葉ながらも伝えたいのです」(同頁)と、明確な「内包された読み手」が想定されていることが明記されている。

また、本書の末尾に置かれた「最後にA君へ」と題する部分は、殺害事件という形をとった加害少年の行為に向けての(母親という立場の書き手からの)手紙として、特定の「読み手」が想定されている。

一方、土師守氏による手記『淳』では、「被害者側の心の軌跡を、当事者ではない人達が、取材はするにしても想像を主体にして、記述したり論評することが本当にできるのだろうか」(『淳』215頁)との疑問から、「やはり、被害者側のまさに当事者からの真実の声を出すことは必要なのではないだろうか」(同頁)との考えに立ち、本書を出版することにしたという理由が述べられているように、より一般化された「読み手」が想定されている。

また、『淳』のなかでも再録されていた1998年5月24日に新聞に発表された「手記」については、「新聞社の求めに応じて」発表されたという経緯にあるように、メディアにおける「神戸の少年事件」報道という文脈上での被害者家族の立場からのコメントとしてメディア側が要

求したものであることが示されている。ここでは、被害者家族の手記は、メディアが定義する事件におけるキャラクター（作中人物）として定位される。

しかしながら、この「手記」を再び『手記』のなかに再録することは、そうしたメディアの文脈をも浮き彫りにすることになるという点で興味深い。後に書物としてポジショニングされることによって、ここでの「手記」のナラティヴの多層性もみえてくるからである。さらにいえば、この『淳』という『手記』もまた、出版社というメディアの文脈の中に定位された「手記」であることから、＜手記のなかの手記＞の認識によるコミュニケーションの多重性の認識をも結果する。

ナラティヴ・コミュニケーションの装置という観点からみたとき、『淳』の中で、著者が、インタビューなどの方法によらずに、手記を書き出版にいたるまでの経過を、次のように述べていることは、興味深い。

「マスコミの方が考えた筋書きではなく、少なくとも私たちの感じたまま考えたままを表現できることは何ものにも代え難いことだと考えました」（『淳』216頁）

また、『彩花へ』においても、手記の出版にいたる経過のなかに、次のような説明がみられる。

「メディアというものの性質上、どうしても言葉の一部分だけが切り取られ、時にはメディア側の事情で言葉がつくり変えられ、とても私たち家族の思いを正しく伝えるにはほど遠い現状がありました」（『彩花へ』2頁）

これらは、手記というナラティヴの形式がもつコミュニケーションとしての有効性を言い当てている。すなわち、たとえばインタビューにおいても、もちろんナラティヴをみることができるのだが、そこでのナラティヴは、あくまでも「問い」に対する「答え」として特徴づけられるのに対して、手記というメディアにおけるナラティヴは「達成される」という特質をもつからである。

また、かつて、筆者は、「教育問題への構築主義的アプローチの可能性」に関する課題研究の報告（第47回日本教育社会学会・課題研究Ⅲ）において、いじめ問題の議論にナラティヴの観点を導入することの意味と可能性を問う議論を展開し、そのなかで、ナラティヴ的認識の可能性として、イバラ&キツセが提起した「クレイム・メイキングのスタイル」のひとつとして「ナラティヴ・スタイル」とも呼びうるスタイルをつけ加えることの可能性を指摘したことがある（cf.瀬戸知也(95)）。

『淳』であれ、『彩花へ』であれ、これらの手記は、社会問題の構築における「ナラティヴ・スタイル」とも呼びうる「クレイム・メイキングのスタイル」の実際例というものを提示しているようにも思われるのである。

#### 4-2. パラ・ナラティヴ

ところで、この二人の被害者の親たちは、実際の書き手であるだけでなく、実際の聴き手／読み手でもある。この事件をめぐる、加害少年のナラティヴに関して、この書き手たちは、いつ

たい、何をどう聴き、何をどう読んだのか。『淳』の場合も、『彩花へ』の場合も、「酒鬼薔薇聖斗」は登場しない。「A少年」あるいは「A君」が登場するだけである。このリアリティ。

『淳』のなかに登場する少年のナラティブについては、著者を含む家族の成員が、事件後、事件に関する新聞の記事やニュースにはほとんどふれていなかったという前置きをしたうえで、次のように記述している。

「『これは若い子が書いた文章だと思います。どう考えてみても、マンガ世代といわれる若い子が書いたものとは思えません』」（『淳』99頁）

そして「『淳を殺した犯人は、せめて二十歳以上の人間であって欲しい』と、心から願っていました。なぜなら、犯人が子供であれば、罪に相当する罰を受けることがないと分かっていたからでした」（『淳』100頁）

とあるように、少年は、あくまでも、自分たちの息子の命を奪った加害者として認識され、それがたまたま少年であったということだけが問題として認識されている。

いくら少年が自分を別の人格としての「酒鬼薔薇聖斗」として自己定義し、自分の行為を意味づけるナラティブをつくろうとも、実際に被害にあった子どもの親からみれば、一人の加害者が判明し、それがたまたま少年法の対象である少年であったということだけが問題とされるにすぎないナラティブとして読まれるだけのことだ、ということがわかる。ここに、ひとつの事件をめぐって、ナラティブの読みの複数性という問題が明示されることになる。

一方、『彩花へ』の大きな特徴は、事件の被害者となった自分の娘についての記憶を、母親の視点から思い起こしつつ書かれている手記というばかりでなく、叙述のなかで、加害少年を含み込んで（また、直接に向けて）書かれているというところにある。

次の記述は、5月の殺害事件の容疑で逮捕された少年が、自分の娘を襲った犯人であることが判明した後の記述である。

「少年は、友が丘中学校の三年生でした。犯行当時、そして逮捕当時、彼はまだ十四歳でした。うちの息子より、一学年、年上ということになります」（『彩花へ』120頁）

という叙述に始まり、「なぜあんなことをしたのか。それが私の一番聞きたいことです」（同頁）と続けたうえで、加害少年のナラティブについて、以下のとおりの解釈を示している。

「彼自身が書いていた『犯行メモ』なるものの存在も明らかになりました。その中で彼は、彩花を襲った日のことを淡々とつづっているようです。彩花たちを襲ったのは、『人間の壊れやすさ確かめるための『聖なる実験』』だったと、彼は書いています。そして、犯行後の自分の行動について、『救急車やパトカーのサイレンが鳴り響きとてもうるさかったです。ひどく疲れていたようなので、そのまま夜まで寝ました』『聖なる実験』がうまくいったことをバモイドオキ神様に感謝します」と書いています。私は亡くなった娘の母親であるだけで、専門家でも何でもありません。この事件を評論家のように論ずる立場とは違います。その意味では、彼が供述した内容について、人並み以上の関心があるわけではありません。『聖なる実験』などという勝手な理屈づけやら、彼がつくった奇妙な神様の謎解きを私がしたところで、彼の罪が許されるわけでも、彩花が戻ってくるわけでもないからです」（『彩花へ』121頁）

ここで著者は、加害少年の書いた文書を、それぞれについて「……と書いています」と「淡々と」叙述するのにとどまり、先程の『淳』の場合と同様、被害者の親の立場からみたとき、そ



これらのナラティブ（「酒鬼薔薇聖斗」のナラティブ）が、いかに「勝手」で、「奇妙」であるか、を冷静に示すのみである。（引用した部分に続く記述は、「それにしても、人間というものは、なんと深い闇を抱えているのだらうと思ひ知らされました」（『彩花へ』121頁～122頁）である。）

さらに、先程も述べたように、『彩花へ』では、少年（「酒鬼薔薇聖斗」ではない！）に向けての（共にある視点からの）語りが、いくたびか登場する。

「あの少年に、いい友達がいたなら……と、この頃思うようになりました。彼を支え、彼の心を癒し、彼を励ましてくれる友達がいたら、あそこまで自分を破滅させることはなかったらうと、かわいそうにさえ思うのです」（『彩花へ』141頁）

「彼にとって『死』は、それまでの『生』の意味をはかないものにすることでしかなかったのでしょうか。彼の周囲には、そんな思想しかなかったのでしょうか」（『彩花へ』159頁）

「もし、私があなたの母であるなら……、真っ先に、思い切り抱きしめて、共に泣きたい。言葉はなくとも、一緒に苦しみたい」（『彩花へ』176頁）

## 5. 再び、＜ナラティブ・コミュニケーションの問題として読む＞ことへ

既に述べたように、ナラティブという方法のメリットは、別の視点からものごとを構成しなおす手段としてナラティブを用いることで、特定のナラティブにとらわれなくなるところ（自明視されたりアリティをかたちづくるナラティブの相対化による、「オルタナティブ」なナラティブの可能性への気づき）にある。

この立場を起点に、「神戸の少年事件」というナラティブ・テキストを、ここでさらにもう一度読みなおしてみたい。

### 5-1. 「視点」「焦点化」の問題

まず、ナラティブにおける「視点point of view」＝「焦点化focalization」（「誰が見るのか」という問い）の問題に注目してみよう。

ナラトログジストのG. ジュネット(85)によれば、ナラティブにおける「焦点化」には、次の三つのタイプがある：(1)「焦点化ゼロ」：「背後からの視像」（「全知の語り手による物語言説」）、(2)「外的焦点化」：「外からの視像」（「客観的、行動主義的な技法」）、(3)「内的焦点化」：「ともにある視像」（「視点のある、反射人物のいる、選択的全知の、視野の制限された物語言説」）の三つである（ジュネット(85)、70頁.）。

「神戸の少年事件」についてみると、「酒鬼薔薇聖斗」のナラティブにおいては「背後からの視像」が、「酒鬼薔薇聖斗」をめぐるナラティブにおいては（主に）「外からの視像」が、そして、被害者の親のナラティブでは「ともにある視像」が、それぞれ特徴的にみられた。

これら三つのタイプのナラティブのなかで、特に「外的焦点化」にもとづくナラティブをドミナントなナラティブとして、この事件はこれまで語られてきたといえよう。ナラティブの展開の過程をみると、「酒鬼薔薇聖斗」自身のナラティブの批判という形で「焦点化ゼロ」のナラティブが批判されることはあっても、「外的焦点化」に比べれば「内的焦点化」にもとづく議論は、あくまでもマイナーな位置にとどまるものでしかなかった。

今年（1998年）になって、1月に『彩花へ』が刊行され、「ともにある」ナラティヴが公にされたことがあっても、3月の『供述調書』のスクープにみられるように、「外からの」あるいは「背後からの」ナラティヴの攻勢の前には、それもマイナーな位置におかれるだけのことであったように思われる。そして現在、9月に、もうひとりの被害者の親の立場から、「ともにある」ナラティヴ（『淳』）が公表されるに及んで、はたして、この「事件」を語るナラティヴ環境は、これまでどおりのドミナントな「外からの」ナラティヴや「背後からの」ナラティヴにたいして、「ともにある」ナラティヴもまた、ひとつのオルタナティヴなナラティヴとして、（被害者の家族だけでなく、わたしたちもまた）語り得る水準を獲得し得たといえるであろうか。

## 5-2. 「内包された書き手」「内包された読み手」の問題

次に、文学批評のジャンルにおいてW. ブースによって提唱された後、W. イーザーやS. チャトマンらによって洗練されていき、ナラトロジーの基本概念となった「内包された書き手 implied author」及び「内包された読み手 implied reader」の問題について考えてみよう<sup>(5)</sup>。

まず、ナラトロジーにおいて使用される専門用語としての意味を確認しておく。「内包された書き手」とは、「テキストから再構築されたものとしての書き手の第二の自己、マスク、ペルソナ」(Prince(87),p.42.)のことをいう。一方、「内包された読み手」とは、「テキストによって予め想定されている受け手、読み手の第二の自己」(op.cit.,p.43.)のことである。いずれの場合も、「内包された」という用語に託されているのは、「テキスト」を媒介としてつくりあげられている、という意味内容である。

たとえば、わたしという実際の読み手は、ごく一部の関係者を除けばだれもがそうであったように、マスメディアを通じて「神戸の少年事件」をはじめて知り、被害者が子ども（小学生）であるということや、死体発見現場の状況に関心をもつなかで、発生直後から次々に公表される文書を読むとき、まだだれが書いたのかわからない時点では、「中年の男性で……」「ロックバンドの……」等々、メディアに登場するさまざまな推理に影響を受けつつ、ある一定の「内包された書き手」を想定し、「なんてひどいことをするんだ。しかも相手は子どもなのに。」などと憤慨しつつ、そのテキストを読んだことをおぼえている。

後に「事件」の容疑者が、14歳の少年であり、中学生である、という報道がなされてからは、「子どもが子どもを殺すなんて。いやな時代になったもんだ。でもなぜそんなことしたんだろうか？」と、おそらく多くの者たちが感じたように、驚きや恐怖の感情とともに、素朴な疑問がわいてきたことをおぼえている。そして、このときは、「14歳の少年」「中学生」という「内包された書き手」を想定しつつ、「事件」に登場してくるさまざまなテキストを、再び読みなおすように変わっていった。

これらのプロセスは、この「事件」に多少なりとも関心をもつ人たちやそうでなくとも日常的にマスメディアに接している人たちであれば、ごく一般的に体験したプロセスなのではないだろうか。つまり、「内包された書き手」は変わっていく。しかもその変化は、実際の読み手とテキストとの関係に依存しているのである。

さて、一方で、この「神戸の少年事件」における「内包された読み手」の問題についてはどんなことがいえるだろうか（既にこの問題についてはこれまでも暗に陽に個別的には論じてきていることではあるが、ここでもう一度復習しておきたい）。

先ず、「酒鬼薔薇聖斗」のナラティブは、死体発見現場に残された「紙片」において「警察諸君」が名指しされ、「犯行声明文」が「神戸新聞社」宛に送付されたように、あるいは、「日記」のなかで「バモイドオキ神様」に向けての報告がなされていたように、特定の「内包された読み手」が明示されたテキストであった。

一方、「酒鬼薔薇聖斗」をめぐるナラティブの方は、多くの場合、「内包された読み手」が明示されているわけではない。しかし、一見ヴァラエティに富む内容が提示されているかにみえるが、表象の最終的なレベルとしてマスメディアというセッティングを通過することで成立することになるナラティブであるということからもわかるように、ここでの「内包された読み手」とは、マスメディア自身である、という解釈も成り立つのではなかろうか。

またもう一方で、被害者の親たちのナラティブでは、「内包された読み手」が（「酒鬼薔薇聖斗」のナラティブの場合とは別の意味で）明確に示されている。『彩花へ』では、「同じように苦しんできた人たち」さらに「すべての人々」（A君を含む）を「内包された読み手」として明記している。『淳』においては、より一般化された形で、「被害者側のまさに当事者からの真実の声を出すこと」によって、「このような事件を理解」しようとする「内包された読み手」に向けて、「手記」が書かれている。

これら三種類のナラティブにみられる「内包された読み手」のあり方を見渡してみたときに気づかされるのは、＜閉じられた「内包された読み手」＞とくひらかれた「内包された読み手」＞という二通りの「内包された読み手」のあり方である。

＜くひらかれた「内包された読み手」＞に向けて書くこととは、はたして、どういうことなのか。それは、たとえば、オウム真理教事件をきっかけに、「オウム真理教の時代を生きなければならぬ＜私＞とは何か」という問いを立て、探究する記述の中で、森岡正博(96)が発した、次のようなく関係のあり方＞とも通底する考え方ではなかろうか。

「私の発したことばや声が、私の知らないところで苦しんでいる人のところまで届いて、その人のかかえている重荷を軽くするための、ほんの少しのサポートができるような、そういうつながり方がきっとあるはずだ。ちょうど、私の知らない人の発したことばが、私のところまで届いて、私を救ってくれるときのように」（森岡正博(96)、217頁。）

### 5－3．ナラティブ世界の構成をめぐる問題

さて、ここからは、「プロット」や「作中人物」などの概念を手がかりにして、ナラティブ世界の構成に関する問題を考えてみよう。

既に指摘したように、「酒鬼薔薇聖斗」のナラティブは、自らがつくり出したひとつの「プロット」上に固定され、閉じられたナラティブとしての特徴をもつものであった。したがって、「オルタナティブ」なナラティブの可能性に向けてひらかれていかない。

「酒鬼薔薇聖斗」をめぐるナラティブについてみてみても、そこには定型的な子ども問題・教育問題のプロットをなぞるように、少年の特異性もしくは社会・家庭・学校等の教育環境の

問題性を繰り返す議論に終始するドミナント・ストーリーが大勢をしめた。

他方で、被害者の親たちのナラティヴは、失われた生命への悼みを主調とするナラティヴであるという共通性ととも、被害者の親たちにとってかけがえのない子どもの個別性のナラティヴとして一貫している。ここでのナラティヴの中には、「酒鬼薔薇聖斗」という「作中人物」及びそのナラティヴ世界は登場しない。

印象深い記述がある。『彩花へ』のなかで、少年に傷つけられた少女の顔の微妙な変化に気づいた著者が、「少年の行為は、もはや彩花を苦しめることなどできなくなっていたのです」（『彩花へ』87頁）とする箇所の記述である。

この記述からは、誰かある人間がつくり出したナラティヴ世界の論理が、他者の生及びそれが依って立つナラティヴ世界に向けて、いくら暴力的に介入してこようと、その人間の生及びそれが依って立つナラティヴ世界を奪うことまではできない、ということ、強く訴える声が響いてくるようだ。

これまでの問題の問い方をもう一度問いなおすこと、言い換えれば、わたしたちの問題の問い方は、いかなるプロット化によってはじまるナラティヴ世界の構成であったのか。今回の「事件」をめぐる登場した多くのナラティヴにおいてみられたのは、＜「酒鬼薔薇聖斗」とは、いったい誰だったのか？＞という問い方であった。

わたしという書き手は、この文章を書くときに、「神戸の少年事件」というナラティヴ世界における「作中人物」の一人として「酒鬼薔薇聖斗」がいる、ということ、はじめ素朴に仮定した上で、論をはじめていたように、「神戸の少年事件」の主たる「作中人物」の一人としての「酒鬼薔薇聖斗」を疑わなかった。

しかし、さきにみてきたように、被害者家族による「神戸の少年事件」ナラティヴには「酒鬼薔薇聖斗」がまったく登場しなかったことから、逆に、先立つ自らの読みにおいて「酒鬼薔薇聖斗」という「作中人物」を、わたしという読み手が造形していたのではないか、ということに気づかされた。

わたしに限らず、神戸において殺害事件が発生し、その死体発見とともに「酒鬼薔薇聖斗」という名前が示されたとき、マスメディアを通してその事実を知らされた者の多くは、その名前を、仮構された名前として、さらにはその実際の書き手像（「内包された書き手」）を、マスメディアの「課題設定」に促されるように、さまざまにイメージした。やがて、「14歳」の「少年」の犯行とわかり、今度は「酒鬼薔薇聖斗」の実際の書き手としての少年を、やはりマスメディアを通した各種の「専門家」の解説に導かれるように、さまざまに「推理」し、「理解」しようとする試みへと移行していった。

つまり、＜この「事件」の少年は、なぜ「酒鬼薔薇聖斗」という作中人物をつくりあげるような書き手になってしまったのか？＞という問い方を自明の問い方とするようになってしまったのである。

しかし、ナラティヴ研究の理論の一つである「読者反応批評理論」によれば、ナラティヴの読み手であるわたしたち自身が、読みの過程において、「作中人物」を「作り」あげている、と考えられる（cf.フィッシュ(92), 他）。

すなわち、ナラティヴ・コミュニケーションの問題として読むというのなら、＜どのような読み手が、どのような「作中人物」としての「酒鬼薔薇聖斗」を作りあげてきたのか？＞を

問うことの方が、よりふさわしい問い方であるといえることができるだろう。

そのように問いの方向性を変えてみたとき、このような事態、つまり、ある「謎の人物」が登場し、その「謎」を「解き明かそう」と、まわりの人間が、さまざまな読み手として、さまざまな解釈を展開し続けるという事態を、わたしたちは、いくたびか経験してきているということに思い至る。

かつて、筆者は、そうした「謎の人物」の一人である「カスパー・ハウザー」をめぐるナラティブを、ナラティブ・アプローチの実際例として取り上げ、「カスパー・ハウザー問題」と呼びなおし、その問題の語られ方を検討したことがある（瀬戸知也(97), 124-137頁.）。

そのときにおこなったナラティブな探究の結果明らかになったことは、「定型化された物語への回収」「自動化された認識作用の自省行為」といった特徴であったが、「神戸の少年事件」においても、同様な特徴を見出すことが可能である。

またその際、「アイロニー」の戦略という問題にふれ、次のような指摘をおこなった。

『『社会化』』といった観点を自明視した子ども観に対する『反対命題』の提示による『弁証法的アイロニー』の展開の可能性を胚胎したモチーフとしての『カスパー・ハウザー』の特徴があぶりだされてくるのではなかろうか（同書、135頁）

そこで指摘した『『社会化』』といった観点を自明視した子ども観への「反対命題の提示」という特徴を、今回の「神戸の少年事件」のナラティブ（「酒鬼薔薇聖斗」ナラティブを含む）の中にも見出す可能性があるといえ、それは単純な類推にすぎないものと聴こえてしまうだろうか。

またもう一方で、「パロディ」というジャンルの意味と可能性についても指摘した。

「ハッチオンによれば、『パロディ』は『批評的距離を保った反復（模倣）』である」（同頁）

「ひとつの「ドミナント・ストーリー」への固着を逃れて、複数の「オルタナティブ・ストーリー」の可能性を示す「問題の外在化」（「距離化」）は、「パロディ」を成立させる条件でもある」（137頁）

そして、わたしという読み手は、この「神戸の少年事件」における「酒鬼薔薇聖斗」ナラティブにたいし、ナラティブ・コミュニケーションの問題として読む行為の遂行において、一見「パロディ」的にみえながらも、「批評的距離」の不在という「パロディ」化についての致命的な欠陥を見出し、その代わりに、『『物語』』という暴力のむきだしの具現の様態をそこに見出してしまふのである。

## [注]

- (1) ここで「神戸の少年事件」とは、1997年3月～5月までの間に神戸市須磨区で連続して起こった小学生殺害事件のことを指す。加害者の少年が「酒鬼薔薇聖斗」と自称して書いた（とされる）いくつかの文書の公表もあり、「酒鬼薔薇事件」という呼び名が使われる場合もある。
- (2) ここで「現象としてのナラティブ」と「方法としてのナラティブ」という二つの観点を立てているのは、Connelly & Clandinin(90)によっておこなわれたナラティブ研究のレビュー論文のなかで、ナラティブが「現象phenomenon」でもあり、「方法method」でもあるとする指摘を踏まえたとえでのことである（Connelly & Clandinin(90),p.2.）。

- (3) ナラティヴを重要概念とする各種臨床領域の中で、特に教育臨床の領域について補足すれば、次のとおりである。先ず、欧米での動向：(1)実践家(教師)による教育実践行為を主導する概念としての「ストーリー」(ベイリー (94)), (2)実践家(カウンセラー)による career counseling の指導原理としての「キャリア・ナラティヴ」( Cochran(97)), (3)ストーリー形態モデルによる授業・カリキュラムの構想 (Egan (88)), (4)「ナラティヴ・フレーム」を用いた個人カリキュラム作成の試み (Lauritzen&Jaeger(97)), (5)新しい意味での経験学習の形態としての「ナラティヴ・スクーリング」のアイデア (Hopkins(94)) 等がみられる。次に、日本における動向としては、(1)実践家(教師)による教育実践行為の自省的概念としての「物語」(諏訪哲二 (90)), (2)研究者による教育実践行為の自省的概念としての「ストーリー」(佐藤学 (95)), (3)研究者による「臨床教育学」の構想における鍵概念としての「物語り」「筋」(皇紀夫 (96)) 等の議論をみることができる。
- (4) このスタンスに属する類例としては、たとえば、河信基(98)による少年Aのライフ・ストーリーの「伝記的」再構成の試みや、村尾建吉(98)による「物語」や「ストーリー」に注目した事件の意味の解釈・再解釈の試みなどをあげることができるだろう。
- (5) 「内包された書き手」「内包された読み手」という概念の重要性は、特に近年の福音書研究における「ナラティヴ批評」の中で明確に示されている。たとえば、Powell(90)にしても、Moloney(92)にしても、テキストとしての福音書を「内包された読み手」として読むことを研究のゴールとして表明している。

#### [引用・参考文献]

- ブース,W.(1991)米本弘一他訳,『フィクションの修辞学』,水声社。  
 ブルーナー,J.S.(1998)田中一彦訳,『可能世界の心理』,みすず書房。  
 チャトマン,S.(1998)田中秀人訳,『小説と映画の修辞学』,水声社。  
 Cochran,L.(1997), Career Counseling: A Narrative Approach, SAGE.  
 Connelly,F.M.&Clandinin,D.J.(1990), Stories of Experience and Narrative Inquiry, Educational Researcher,vol.19.,No.5.pp.2-14.  
 Cortazzi,M.(1993), Narrative Analysis, The Falmer Press.  
 Czarniawska,B.(1998), A Narrative Approach to Organization Studies, SAGE.  
 Egan,K.(1986), Teaching as story telling, Althouse Press.  
 Freedman,J.&Combs,G.(1996), Narrative Therapy, W.W.Norton.  
 フィッシュ,S.(1992)小林昌夫訳,『このクラスにテキストはありますか』, みすず書房。  
 Fisher,W.(1987), Human Communication as Narration, Univ.of South Carolina Press.  
 ジュネット(1985)和泉涼一訳,『物語の詩学』, 書肆風の薔薇 (水声社)。  
 河信基(1998),『酒鬼薔薇聖斗の告白』, 元就出版社。  
 土師守(1998),『淳』, 新潮社。  
 Hatch,J.A.&Wisniewski,R.(1995), Life History and Narrative, The Falmer Press.  
 Hopkins,R.L.(1994), Narrative Schooling, Teachers College Press.  
 イーザー,W.(1982)響田収訳,『行為としての読書』, 岩波書店。  
 Kreiswirth,M.(1995),Tell me a Story, In Kreiswirth&Carmichael(Eds.)Constructive Criticism, Univ.of Toronto Press.  
 Lauritzen,C.&Jaeger,M.(1997),Integrating Learning, Delmer Publishers.  
 Labov,W.&Waletzky,J.(1967),Narrative Analysis,In Helm(Ed.)Essays on the verbal and visual arts, Univ.of Washington Press.pp.12-44.  
 Liebes,T.(Ed.)(1994), Narrativisation of the News, LEA.  
 マッキンタイア,A.(1993)篠崎栄訳,『美徳なき時代』, みすず書房。

- マクナミー&ガーゲン(1997)野口裕二他訳、『ナラティブ・セラピー』, 金剛出版.
- 宮台真司(1997), 『透明な存在の不透明な悪意』, 春秋社.
- Moloney,F.J.(1992), *Biginning the Good News: A Narrative Approach*, St.Paul Publications.
- 森岡正博(1996), 『宗教なき時代を生きるために』, 法蔵館.
- 村尾建吉(1998), 『マージナルな14歳』, 鹿砦社.
- 野口裕二(1995), 「物語としてのAC」『アルコール依存とアディクション』第12巻第1号. pp.2-4.
- 小田晋(1997), 『神戸小学生殺害事件の心理分析』, 光文社.
- Onega,S.et.al.(1996),*Narratology*,Longman.
- ペイリー (1994) ト部千恵子訳, 『ウオーリーの物語』, 世織書房.
- Powell,M.A.(1990), *What is Narrative Criticism?*, FORTRESS PRESS.
- Prince,G.(1987), *A Dictionary of Narratology*, Nebraska.
- Richardson,L.(1990), *Narrative and Sociology*, *Journal of Contemporary Ethnography*, Vol.19.N0.1.pp.116-135.
- Riessman,C.K.(1993), *Narrative Analysis*, SAGE.
- 桜井亜美(1997), 『14 fourteen』, 幻冬舎.
- Sarbin,T.R.(1986),*Narrative Psychology*, Praeger.
- 佐藤学(1995), 『学びその死と再生』, 太郎次郎社.
- 瀬戸知也(1995), 「『物語』の観点からみた『いじめ』問題」, 第47回日本教育社会学会発表用資料.
- 瀬戸知也(1997), 「映像テキストと物語的アプローチ」北澤毅・古賀正義編『<社会>を読み解く技法』, 福村出版. pp.116-138.
- 皇紀夫(1996), 「学校のコスモロジー」藤本浩之輔編『子どものコスモロジー』, 人文書院.
- 諏訪哲二(1990), 『反動的!』, J I C C 出版 (宝島社).
- ホワイト,H.(1987)海老根宏他訳, 「歴史における物語性の価値」ミッチェル編『物語について』, 平凡社. pp.15-49.
- ホワイト&エプストン(1992)小森康永訳, 『物語としての家族』, 金剛出版.
- 山下京子(1998), 『彩花へー「生きる力」をありがとう』, 河出書房新社.

(付記)本研究は、第50回日本教育社会学会での「課題研究Ⅲ(神戸の少年事件がきっかけしたもの)」(1998年11月1日、於：大阪大学)において筆者が口頭で報告する予定の原稿をもとに、多少の補足・修正を施したものである。

(1998年10月21日受理)